



**Data**

監督・製作: スティーヴン・スピルバーク

原作: トーマス・キニーリー『シンドラーの箱船』

出演: リーアム・ニーソン/ベン・キングズレー/レイフ・ファインズ/キャロライン・ゲッティン/ジョン・セガール/エンベス・デイヴィッツ/マーク・イヴァニール/アンジェイ・セヴェリン/アディ・ニトウザン

## 👁️👁️ みどころ

日本の外交官・杉原千畝はソ連から「歓迎されざる人物」を意味する「ペルソナ・ノン・グラータ」と呼ばれた。他方、彼が発給した2139枚のビザは「命のビザ」と呼ばれ、彼は「日本のシンドラー」と呼ばれたが、それは一体なぜ？しかして、本作が描く、「シンドラーのリスト」とは一体ナニ？

本作導入部では、ハンサムでカッコいいが、戦争を利用し、ユダヤ人の安い労働力を利用して金儲けを企むいかにも嫌な本作の主人公オスカー・シンドラーに注目！また、ゲッターと強制収容所で、冷酷無比ぶりを発揮するレイフ・ファインズ扮するSS将校の姿にも注目！

大量のユダヤ人がアウシュビッツ強制収容所に送られる中、ナチス党员でもあったドイツ人実業家の人格はいかに変わっていったの？クライマックスでは、そんな人間賛歌をしっかりと味わい、気持ちよい涙を流したい。人間のすばらしさを実感できるこんな映画を提供してくれたスピルバーク監督に感謝！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■主人公は長身！カッコいい！でも、ちょっとキザ？■□■

1993年の第66回アカデミー賞で12部門にノミネートされ、作品賞、監督賞等7部門を受賞した本作は、スティーヴン・スピルバーク監督の名作中の名作。その主人公はオスカー・シンドラー（リーアム・ニーソン）だ。その名前は公開から40年近く経った今では、ナチスドイツの迫害から多くのユダヤ人を救った人物として広く世間に知れ渡っている。しかし、1993年の公開当時、トーマス・キニーリーの原作『シンドラーの箱船』（後に『シンドラーのリスト』に改題）はもちろん、オスカー・シンドラーというドイツ人実業家（で実はナチス党员）の名前を知っている日本人はほとんどいなかったはずだ。

本作冒頭の舞台は、ポーランド南部の都市クラクフ。時は、1939年9月1日のナチ

ストドイツ侵攻の直後だ。シンドラーの故郷はチェコのプリンリッツだが、瞬間にポーランド西部を制圧し、東部から侵攻してくるソ連とポーランドの領土を分け合った(?) ナチスドイツの勇姿(?) を見たシンドラーは、この戦争を利用して一儲けするべくクラクフの町に乗り込んできたらしい。これは、「商売人のカン」に基づくものだが、本作導入部にみる、長身でカッコいいシンドラーがクラクフの町で、カネ、酒、モノ、女を巧みにナチス将校にばらまき、巧みな会話と交渉術で己の商売を進めていく姿は見応えがある。そのどぎつさと厚かましさは大阪商人的色彩だが、少しキザな立ち居振る舞いは東京的?

そんな長身でカッコいいドイツ人実業家シンドラーを演じるのは、近時は『96時間』(08年)、『シネマ23』未掲載、『96時間/リベンジ』(12年)、『シネマ30』未掲載、『96時間/レクイエム』(14年)、『シネマ35』132頁) 等でのハードなアクションがすっかり板についた俳優リーアム・ニーソンだ。『戦場のピアニスト』(02年)、『シネマ2』64頁) でエイドリアン・ブロディが演じた主人公シュピルマンも面長で長身だったが、本作のシンドラーもその長身とハンサムさ、そして少しキザな姿が際立っている。本作は、途中1分間のインターミッションを含む3時間15分の長尺だが、導入部ではリーアム・ニーソンが演じる本作の主人公オスカー・シンドラーの姿をしっかりと目に焼き付けておきたい。

## ■豊富なコネ、安い工場と労働力、更に有能な腹心！■

「法治主義」のアメリカや日本では、商売も「法の下での平等」に沿った「自由競争」になる。しかし、「人治主義」の中国では、「法の下での平等」以上に中国共産党の幹部や(中央地方) 政府の幹部とのコネが大事だから、それが豊富か貧弱かが勝敗を分けることになる。また、中国では土地の所有(私有) が許されないうえ、土地の利用権も政府が握っているから、その利用権をいかに安く手に入れるかが商売の成否を決めることになる。

そんな21世紀の姿に対して、1939年9月1日にナチスドイツがポーランドに侵攻した直後のクラクフの町で、これからはカネよりもモノが必要になると見込んでホーロー容器の事業を開始したシンドラーは、まず倒産した工場を安く買収したうえ、賃金の高いポーランド人を避けて、賃金の安いユダヤ人を大量に雇用することに。それ以上に商売が成功するか否かのポイントは、原材料の仕入れやその販売ルートの確保、そして利益率の計算等だが、それについては『嘘八百』(17年)、『シネマ41』72頁) で中井貴一が演じた、口の達者な古物商・小池則夫に勝るとも劣らない話術でナチスの将校たちに取り入るシンドラーの姿に注目！まさに、ワイロ、モノ、酒、女を使えば何でもオーケー、という世界がそこに広がっている姿を堪能したい。

もっとも、シンドラーはその方面は得意だが、数字や帳簿等の事務作業は苦手だったらしい。しかし、ユダヤ人はその方面に天才的な能力を持つ人物が多い。そこで、シンドラーが目をつけたのが、ユダヤ人会計士のイザック・シュターン(ベン・キングズレー)。ユダヤ人のイザックとしては、ナチス党员でもあるシンドラーのホーロー容器事業に協力することに苦悩したのは当然だが、「ユダヤ人の雇用が進み、かつ工場内でのユダヤ人の安全

が保証される」というシンドラーの主張にも一理ある。その結果、クラクフの町で始めたシンドラーのホーロー容器工場はたちまち大繁盛していくことに。

## ■□■ゲッター内のユダヤ人は？それも商売に逆利用？■□■

本作は、多くのユダヤ人を救ったドイツ人実業家シンドラーの英雄的かつ献身的な物語として有名になった名作。しかし、導入部から中盤にかけてナチスドイツによるユダヤ人への迫害が進み、壁に囲まれたゲッター（居住区）内にユダヤ人を閉じ込めてしまう中、シンドラーがそれを商売に逆利用する姿を見ていると、この男は一体ナニ！弱い物をトコトン利用して自分だけの儲けを狙うイヤな奴！そんなイメージが強まってくる。

ナチスドイツがユダヤ人をゲッター内に居住しなければならぬと義務づけたのは、1941年3月。また、ゲッター内に住むには一定の職務に就いていることが条件だから、老人や身寄りのない子供だけで住むことは不可能だ。そこで、シンドラーとイザックが考案したのは、「シンドラーの工場で働くなら、ゲッター内に居住させてやる」と言えば、タダもしくは超安価な労働力としてユダヤ人を使えるのでは？ということだ。この思惑は見事にハマり、ゲッター内で（安全に）住むため、タダ同様の賃金でもシンドラーのホーロー容器工場で働きたいというユダヤ人が殺到してきたから、シンドラーはウハウハ。まさに、この男はカネの亡者だ。もっとも、この時期にはシンドラーのこのやり方でゲッター内に住むことができたユダヤ人にもメリットがあったから、そうとばかりもいえず、両者の利害は一致していたのかも・・・？しかし、ヒトラーによるユダヤ人絶滅作戦が更に進行し、ゲッターが閉鎖され、プワシュフ収容所への移送が開始されると・・・？

## ■□■新任のSS将校もカッコいいが、その冷酷無比ぶりは？■□■

本作中盤から登場するのが、ゲッターの閉鎖に伴って新たに設置されたプワシュフ収容所の所長として就任してきたナチス親衛隊（SS）将校のアーモン・ゲート少尉。この役を演じる俳優はレイフ・ファインズだが、私が彼をはじめて知ったのは『イングリッシュ・ペイシェント』（96年）を観た時。同作はストーリーも、2人の女優もすばらしかったが、同作ではとにかく彼のカッコ良さが際立っていた（『シネマ1』2頁）。その後の彼は、『ナイロビの蜂』（05年）（『シネマ11』285頁）、『愛を読むひと』（08年）（『シネマ22』36頁）、『ハート・ロッカー』（08年）（『シネマ24』15頁）、『007 スカイフォール』（12年）（『シネマ30』232頁）、『グランド・ブダベスト・ホテル』（13年）（『シネマ33』17頁）、等で大活躍しているが、『シンドラーのリスト』はアカデミー主演男優賞にノミネートされた『イングリッシュ・ペイシェント』より前の映画だから、彼の「若さ」と「カッコ良さ」がより際立っている。そんな若くカッコいいレイフ・ファインズだが、プワシュフ収容所所長アーモン・ゲート少尉役のSS将校として登場する、彼の冷酷無比ぶりは？

クエンティン・タランティーノ監督の『イングリシアン・バスターズ』（09年）では、全編を通じてブラッド・ピット演じるアメリカの特殊部隊イングリシアン・バスターズのアルド中尉に並ぶ主役級の存在感を見せていた、ナチスドイツのランダ大佐の残忍性が目

立っていた（『シネマ 23』17頁）が、そこでは、彼の話術の巧みさと有能さも同居していた。それに対して、本作のゲート少尉の残忍性はそのワケがわからず、幼稚性が目立つから始末が悪い。彼は、プワシュフ収容所長としての仕事はそれなりにこなしていたようだが、収容所内を見下ろす高層邸宅のベランダから楽しむかのようにライフルで適当にユダヤ人を射殺したり、収容所内を歩いている時、いきなり気が向いたようにすれ違ったユダヤ人をピストルで撃ったりしていたから、その処罰（射殺）の基準に一貫性がないことが目立つ。そんなゲート少尉が酒と女に溺れていたのはある意味当然だが、彼の身の周りを世話するユダヤ人のメイドを選定するについても、その基準はハチャメチャ。さらに、その使い方や接し方も極めてアブノーマル（？）だから、始末が悪い。そんなゲート少尉は今風の病名でいえばきっと「発達障害」だろうが、本作ではそんな残忍で冷酷無比な SS 将校ゲート少尉役をレイフ・ファインズが静かに熟演しているので、それに注目！

### ■□■ ついにアウシュビッツへ！ さあ彼はどうするの？ ■□■

他方、そんな所長ともうまく折り合いながらご機嫌取りをしなければならないシンドラーは、もっと大変。何の理屈もなく、いとも無造作に収容所内のユダヤ人を射殺しているゲート少尉に対して、シンドラーは「工場の生産性を向上させるため」と称して、ユダヤ人労働者をより多く譲り受けることにし、それによって一人でも多くのユダヤ人の命を救おうと決意することに。しかし、プワシュフ収容所が廃止されると、必然的に同所でのホーロー容器工場の稼働はムリだから、彼は一体どこに新工場を作ればいいの？

スピルバーグ監督は3時間15分の本作をあえてモノクロ映像で撮影したが、収容所内で赤い服を着た1人の少女が隠れるシーンだけ一瞬カラー映像にしている。そこには違和感もあるが、きっとそれ以上の効果が……。『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』（99年）（『シネマ 1』50頁）が描いたように、ポーランド内のゲットーでは完全に情報から隔離されていたが、ある日偶然聞いたラジオ放送によって、ソ連軍（解放軍）が東から侵攻していることを知った囚人たちは、大きな希望を持つことができた。しかし、本作ではプワシュフ収容所が閉鎖されるに伴って、ユダヤ人は次々とアウシュビッツに送られることになったから、大変だ。もっとも、アウシュビッツに送られるユダヤ人はどうなるの？

本作では、プワシュフ収容所内のユダヤ人たちがそれを議論する（？）風景が登場するが、もちろんその真相を知っているユダヤ人は誰一人いない。しかし、ゲート少尉はもちろん、シンドラーもそれを知っている。そこで、シンドラーが下した決断は、ホーロー容器工場をポーランドのクラクフから自分の故郷であるチェコのプリンリッツに移し、そこにユダヤ人労働者をできるだけ多く連れて行くこと。これは、故郷での土地・建物の購入の他、連れて行くユダヤ人のリストアップから膨大な距離の移動まで、大変な費用と労力を要する作業だから、この決断は大変。もちろん、経営とか金儲けを考えれば、こんな決断はナンセンスだ。しかして、本作導入部では、①この戦争を利用して一儲け、②タダ同然の安いユダヤ人労働力を利活用して金儲け、そう考えていたはずのシンドラーが、この

時点でなぜこのように変化したの？それをじっくり考えたい。

## ■□■リストに名前を！一人でも多く！そうすれば・・・■□■

唐沢寿明が杉原千敏役で主演した『杉原千敏 スギハラチウネ』（15年）は、外交官である杉原が本来の業務であるビザにサインするシークエンスから始まった（『シネマ 36』10頁）。それと同じように、本作冒頭も、シンドラーがイザックと共に何らかのリストに名前をタイプで打ち込んでいくシークエンスから始まる。しかし、このリストは一体ナニ？そして、本作のタイトルが『シンドラーのリスト』とされているのは一体なぜ？

杉原がソ連から「ペルソナ・ノン・グラータ」と呼ばれていたことを私は同作を観てはじめて知った。「ペルソナ・ノン・グラータ」とは外交用語の1つで、ラテン語の直訳「好ましからざる人物」の意から転じて、「歓迎されざる人物」という意味。なぜ杉原はそう呼ばれていたの？それは、杉原が1939～40年にかけてリトアニアにある在カウナス日本領事館領事代理として勤務していたときに、ドイツ占領下のポーランドからリトアニアに逃れてきたユダヤ人に対して、合計2139枚の日本を通過するビザ（命のビザ）を発給したためだ。そんな、ソ連から「ペルソナ・ノン・グラータ」と呼ばれる行為によって命を救われたユダヤ人から、杉原千敏は「日本のシンドラー」と呼ばれたわけだ。

すると、「シンドラーのリスト」とは一体ナニ？それは、シンドラーがユダヤ人はホーロー容器工場に必要な生産力だという名目で、1200名以上ものユダヤ人のアウシュビッツ収容所行きを阻止したため。つまり、「シンドラーのリスト」とは、まさにそのユダヤ人の名前を記したリストのことなのだ。この「リスト」に沿った人選によってアウシュビッツ送りを免れたユダヤ人は、チェコのプリンリッツ行きの列車に乗り、そこで新たに営業が始まった工場で働いたわけだが、それに膨大なカネがかかったのは当然。シンドラーはそのすべての費用を負担して命のリストを作ったわけだ。

本作は、すべての物語が終わった後、シンドラーのお墓を次々とユダヤ人が訪れ、感謝の印として指輪を贈るシークエンスが登場する。その指輪には「一人の人間を救う者は世界を救う」と刻まれていたが、このシークエンスもモノクロではなく、カラー映像になっている。これは「シンドラーのリスト」によって命を救われた多くのユダヤ人の子孫たちによるものだが、本作ラストには、シンドラーが「一人でも多く！」「金貨があと1枚あれば、あと1人救えたのに！」と叫ぶ姿が登場するから、それにも注目！人間って、変われば変わるもの。これが導入部で見たあの金儲けの亡者のようなシンドラーの打って変わった姿なのだ。こんな感動的な映画をスピルバーグ監督が作ってくれたことに感謝！そして、それを改めてDVDで鑑賞できたことに感謝！

2020（令和2）年3月5日記